

シリーズ6

内閣総理大臣を覚えよう！（４）

今回の「内閣史」は犬養毅が暗殺されてからポツダム宣言を受諾するまでの時代で、いわば「**軍国主義の時代**」を扱います。

五・一五事件以後の内閣は、軍人の比率が高まりますが、彼らの多くは任命時は天皇の信頼を受けて就任した、いわば「**拳国一致**」内閣です。そして大東亜戦争、アジア・太平洋戦争に突入し、敗戦を迎えることになります。

「軍国主義」の時代というと、いかにも独裁者的な軍人が多いような気がします。でも、実情は違うようです。例えば、海軍の斎藤・岡田は「現状維持派」で軍国主義体制の樹立には反対でしたし、米内は三国同盟には反対していました。また、鈴木は現役を終えた後は侍従長等を歴任しました（二・二六事件で重傷を負います）。陸軍の阿部は肅軍人事を行った経験をもち、東条にいたっては天皇から実直さが高く買われていました。

反対に、華族・官僚出身の首相の内閣に注目すると、**広田弘毅内閣**の時には**軍部大臣現役武官制**が復活しています。**近衛文麿内閣**は**日中戦争時に相づく声明を出して、中国との戦争の早期解決の機会を失ってしまいます**。また、国家総動員法、ドイツのナチスをまねた大政翼賛会、日独伊三国同盟など戦争体制づくりが目立ちます。近衛内閣（第2次）発足時には、多くの人びと・政党が結集して「**新体制**」樹立を唱えたことを忘れてはいけません。

軍国主義時代の内閣総理大臣

「さおひは こひあよ こことこす」

- 第30代→（１） 1932. 5～、海軍軍人
32年：日満議定書（日本政府は「満州国」を承認）
33年：国際連盟を脱退、滝川事件
第31代→（２） 1934. 7～、海軍軍人
34年：満州国、帝政となる（皇帝は溥儀）
35年：天皇機関説問題、36年：二・二六事件

- 第32代→(3) 1936. 3～、外務官僚・外相
 36年：軍部大臣現役武官制を復活、日独防共協定
 37年：政友会代議士（浜田国松）の「腹切問答」→退陣
- 第33代→(4) 1937. 2～、陸軍軍人
 「祭政一致」「軍財抱合」を唱える
- 第34代→(5) (第1次) 1937. 6～、五摂家（公爵）
 37年：盧溝橋事件 →日中戦争、上海事変（第2次）、企画院創設、
 日独伊三国防共協定、南京事件
 38年：国家総動員法、張鼓峰事件
 近衛声明第1次「国民政府を対手とせず」
 近衛声明第2次「東亞新秩序の建設」
 近衛声明第3次「善隣友好・共同防共・経済提携の3原則」
- 第35代→(6) 1939. 1～、司法官僚・枢密院議長
 39年：ノモンハン事件、国民徴用令、
 独ソ不可侵条約（ドイツの大戦準備）
 →「欧州の天地は複雑怪奇」の声明を発して退陣
- 第36代→(7) 1939. 8～、陸軍軍人
 39年：内閣発足の2日後に第二次世界大戦はじまる。大戦へは不干涉、
 陸軍の協力が得られず短期間で退陣
 アメリカが日米通商航海条約の廃棄を通告
- 第37代→(8) 1940. 1～、海軍軍人
 40年：大戦不干涉政策をとる内閣に対し、新体制運動がおこる。
 陸相（畑俊六）の単独辞職により、退陣。
- 第38代→(9) (第2次) 1940. 7～
 40年：北部仏印への派兵、日独伊三国同盟、大政翼賛会の結成
 41年：日ソ中立条約、日米交渉の開始、独ソ戦争の勃発
- 第39代→(10) (第3次) 1941. 7～、外相の松岡洋右を豊田貞次郎にかえて発足
 41年：南部仏印への派兵、帝国国策遂行要領
- 第40代→(11) 1941. 10～、陸軍軍人
 41年：ハル＝ノート、日米（英）開戦 →太平洋戦争
 42年：翼賛選挙実施、ミッドウェー海戦、
 43年：大東亜会議
 44年：サイパン陥落により退陣
- 第41代→(12) 1944. 7～、陸軍軍人、米内光政が副首相格として入閣。
 45年：東京大空襲、アメリカの沖縄上陸開始
- 第42代→(13) 1945. 4～、海軍軍人・侍従長
 45年：ポツダム宣言黙殺の宣言、広島・長崎への原爆投下、ソ連の対日参戦
 ポツダム宣言受諾

- | | | |
|------------|-----------|-----------|
| (1) 斎藤実 | (2) 岡田啓介 | (3) 広田弘毅 |
| (4) 林銑十郎 | (5) 近衛文麿 | (6) 平沼騏一郎 |
| (7) 阿部信行 | (8) 米内光政 | (9) 近衛文麿 |
| (10) 近衛文麿 | (11) 東条英機 | (12) 小磯国昭 |
| (13) 鈴木貫太郎 | | |